

教職課程における「教職に関する科目」と 「教科に関する科目」の連携Ⅲ —アクティブ・ラーニングを意識した授業づくり—

A Study of Cooperation between "the Subjects concerning Teaching Profession" And "the Subjects concerning the Specific Field of Profession" in a Teacher - Training Course

Ⅲ

—Giving a Lesson Based on an Active Learning - Conscious Approach—

佐藤 由美*¹

Yumi SATO

田中 信司*²

Shinji TANAKA

序

本稿は、教職課程における「教職に関する科目」（以下、「教職科目」と略す）と「教科に関する科目」（以下、「教科科目」と略す）の連携について検討してきた連作のまとめに当たり、学生による授業づくりの記録が中心となる。因みに「連携Ⅰ」では蒙古襲来¹⁾、「連携Ⅱ」では一ノ谷の戦いで平忠度を討った武将、岡部六弥太忠澄²⁾を取り上げ、教職科目と教科科目の連携を模索した。これらをもとに、今年度の教職科目「社会科教育法」では「蒙古襲来」と「平氏の滅亡」の授業づくりを行った。この授業づくりの過程において教科科目との連携がどのように活かされたのか、または活かされなかったのかを検証することが本稿の目的の一つである。また、この授業づくりはアクティブ・ラーニングを意識することも課題としており、その視点からも検討を加えることとしたい。

アクティブ・ラーニング³⁾は、現在、多くの小学校、中学校、高等学校、そして大学の授業に取り入れられている。学生たちも教育実習先で、アクティブ・ラーニングで授業を行うようにと指導される。しかし、このアクティブ・ラーニングは「曲者」だ。誤解を恐れずに言えば「アクティブ・ラーニング擬き」、もう少し好意的に言えば「試行錯誤中のアクティブ・ラーニング」によく出会う。自分自身の実践を振り返ってみてもアクティブ・ラーニングの導入はそう簡単な話ではなく模索中である。そこで先進的な事例を勉強すべく、2016年11月5日、6日に弘前大学で開催された日本社会科教育学会第66回全国研究大会に参加した。なかでも課題研究「社会科におけるアクティブ・ラーニングの課題と可能性」が興味深かった。プログラムに掲載された趣旨には「アクティブ・ラーニングが次期学習指導要領で柱の一つとされ、その在り方を巡って学校現場では戸惑いと混乱が生じています。そしてその混乱は、学びの形式ばかりに注目がおよび、内容面が等閑視されるという現実をも生み出してはいないでしょうか。(中略) 社会科の内容論と方法論の結合したアクティブ・ラーニングの在り方について探っていきたいと思いま

*1 埼玉工業大学人間社会学部情報社会学科

*2 埼玉工業大学人間社会学部非常勤講師

す。」(下線:筆者)とあり、それは筆者自身の問題意識と合致するものだった。当日の報告の一つ、「公民科におけるアクティブ・ラーニングの課題と可能性—『契約』を通して消費者法の基本的価値を考える実践から—」(東京都立雪谷高等学校小貫篤教諭)では、アクティブ・ラーニングの実践のため、教員には、①内容についてどれだけ多くの専門的な知識が必要か、②生徒に主体的に学ばせるための課題設定のセンスや方法論が必要か、③それらの準備のための時間が必要かということを再認識させられた。大学の教職課程の授業、とりわけ教職科目の社会科教育法においてアクティブ・ラーニングを意識した授業づくりを行うには、内容論の部分を担当教科科目との連携がやはり不可欠なのだという点を確信した。

さて、今回の授業づくりの実践に先立ち解決しなければならないいくつかの問題があった。それは、①学生の授業観を変えること、②学生自身に社会科(歴史分野)の楽しさを実感させること、③当該単元について豊富な知識を持たせることである。言うは易く行うは難しだ。後述するが、学生たち自身がアクティブ・ラーニングを経験したことが少ないうえに社会科を暗記科目だと捉えている節があった。また、教員養成系の大学や歴史学科でないこともあり、学生の歴史分野に関する知識は教職課程で行われる科目の範囲に限られた。さらに学生たちはそれぞれに忙しく自主的な勉強の時間を十分に持てなかった。このような状況を踏まえて、まずは授業づくりの実践を開始し、形成評価を行いながらその都度、必要なものを補充する方針で進めていくことにした。

1. 教職科目「社会科教育法」における実践

(1) 社会科教育法Ⅲ

社会科教育法Ⅲは3年次前期に配置されており、今年度の履修者は5名(体育会系男子学生)だった。2年次に「社会科・地歴科教育法Ⅰ」と「同Ⅱ」を履修しており、授業づくりに必要な基本的事項は既習である。2年次は学習指導要領、教科書をもとに型を学ぶことが優先されている。毎年、履修学生の人数や状況を見ながら2年次、3年次の教科教育法の授業内容を調整しているのが実情だ。今年度前期は新たな取り組みとして、以下のような課題を出した。いずれも佐藤・田中による「連携Ⅰ」及び「連携Ⅱ」で得た知見を取り入れた授業づくりをして欲しいと考えたからだ。授業では「連携Ⅰ」及び「連携Ⅱ」を配布し、それぞれのポイントについて説明した。

課題A 蒙古襲来の授業づくり

授業のなかに教科書で使用されていない『蒙古襲来絵詞』の一場面を必ず用い、生徒に絵詞の読み取りをさせる活動を入れること。

課題B 平氏の滅亡の授業づくり

授業のなかに一ノ谷の戦いに参戦した岡部の武将、岡部六弥太忠澄を登場させて、歴史学習のなかで地域を身近に感じさせるような取り組みを必ず入れること。

学生5名はそれぞれに課題Aか課題Bを選び、各自が学習指導案を作成、板書計画やプリントを作成するなどして模擬授業に臨んだ。3名の学生が課題Aを、2名の学生が課題Bを選択した。学習指導案

は何度か添削する。また、模擬授業のあとは必ずディスカッションを行い、そこで出た意見をもとに学習指導案の修正を行って清書を提出することになっている。教科書は、課題Aでは東京書籍、課題Bでは清水書院のものを使用した。教科書単元の詳細については「連携Ⅰ」、「連携Ⅱ」を参照されたい。

課題Aに取り組んだ学生たちは、「連携Ⅰ」の田中の解説を活かすことができなかった。それはそれ(論文は論文)、これはこれ(授業は授業)といった具合に個人的に気になった絵詞の場面を選んで授業に入れてきた。「連携Ⅰ」を配布しポイントについては指摘したものの、時間をかけて一緒に丁寧に読んでいくといったことをしなかった筆者(佐藤)の反省点にもなった。さらに授業づくりの過程で、ひとりの学生から「絵詞の場面の読み取りなんて必要なんですか。太字の説明とかしていたらそんな時間はないんですけど。」という発言があった。先述の①学生の授業観を変えること、②学生自身に社会科(歴史分野)の楽しさを実感させることの必要性をまたもや感じる瞬間だった。「連携Ⅰ」でも述べたように、中学校や高等学校で受けた歴史教育、または学習塾で学んだ勉強法などが学生たちの授業観を左右することがある。当然のことながら受験対策と学校の授業ではその目的が異なるが、自分自身の経験からなかなか自由になれないのだ。

課題Bに取り組んだ学生のうち1名は、「連携Ⅱ」で田中が歩いた岡部地域の史跡を自分でも歩いて写真を撮って来た。パソコンに取り込んで授業の後半で生徒に見せる計画だった。しかしながら、模擬授業ではそこまで辿り着けずに時間切れとなり、写真のデータはもう1名の学生が譲り受けることになった。中学校社会科の教科書は見開き2頁で内容がひとまとまりとなっているため、それを50分で扱うことが多いが、後半の1頁だけを範囲として岡部六弥太忠澄を登場させることにした。しかし、それでも授業時間内に史跡を紹介するのが精一杯で、生徒が主体的に考えるような発問を投げかけるところまではいかなかった。そもそもこれらの内容を1時間で計画すること自体が無理なのではないかという批判も上がり、課題を出した筆者(佐藤)の反省点にもなった。いずれにしろ「もっとできるはず」という思いを残して前期の授業づくりは終わった。

(2) 東京国立博物館の見学

前期末には東京国立博物館の見学を計画し、3年生5名の他に2年生2名と1年生1名が参加した。見学の前に博物館の展示品を一つずつ割り当て、その展示品の前にきたら解説するという課題を出しておいた。また、「本物」を見ることで何らかの感動を味わって欲しいという気持ちもあったし、教科書に載っている展示品が多数あるので、それを実際に見ることでどんな発問ができるのかを考えて欲しいというねらいもあった。岡部六弥太忠澄との関連で言えば、忠澄が平忠度の供養のために建てた五輪塔や板碑と同時代のものが展示されているため、深谷市の清心寺の五輪塔や板碑の歴史的価値も知って欲しかった。さらに、これらを通じて先述の②学生自身に社会科(歴史分野)の楽しさを実感させること、③当該单元について豊富な知識を持たせることの助けとしたかった。見学の感想をメールで送るように指示したところ、「知識があればもっと楽しく見れたのに」という感想が寄せられた。意味がわからなければただの陳列品ということだが、「知識のあることが楽しさに繋がる」ということは実感されたように見えた。

(3) 岡部中学校の授業見学

後期の「社会科教育法Ⅳ」の授業づくりは、来年度の教育実習を見据えて各自が自由に分野と単元を選べることにしていた。この授業づくりの途中で近隣の岡部中学校の社会科の授業を見学させていただく機会に恵まれた。2年生と1年生の地理分野の授業だった。やはり大学での模擬授業と圧倒的に異なるのは本物の中学生がいることだ。特別支援学級の担任もされているというベテランの先生の授業では、生徒を学習に向かわせる雰囲気づくりや生徒への温かくも確かな声掛けを学んだ。また若手の先生の授業ではテンポの良さ、キビキビとした授業展開、あらゆる場面で生徒を参加させる積極的な働きかけを学んだ。先に絵詞の読み取りなんて必要なかと言った学生が、大学までの帰り道に「こんな授業を受けたことがない。自分が受けてきたのは暗記中心の授業ばかりだった」とポツリと言った。社会科は暗記科目ではない。この授業見学により、学生たちはより具体的に授業を構想できるようになった。教室の雰囲気、生徒たちの反応がイメージできるようになったのだ。

(4) 「社会科教育法Ⅴ」—前期授業のリベンジー—

博物館見学や岡部中学校の授業見学、さらに授業づくりの積み重ねによって学生たちは成長を続けている。本来、「社会科教育法Ⅴ」という授業はないのだが、空き時間を使って「課題B」の授業の作り直しが始まった。授業は2時間扱いとすることはすぐに決まったのだが、内容をどこで区切れればいいのか、板書で進めるのか、プリントを作成するのか等、いくつかの課題があった。この時の学生のやり取りの中では以下の発言が重要だった。

* 岡部六弥太忠澄をどこに位置付けようか。時系列でやっていって一ノ谷の戦いのところで登場させるのか、一度、壇ノ浦までやって平氏を滅亡させてから一ノ谷に戻るのか。生徒はどっちが混乱しないだろう。

* 歴史の授業で生徒に主体的に考えさせるには、やはり発問が大事だろう。よい主発問をいくつか設定できれば考えさせる授業ができるのではないか。

* 知識がなければ生徒は考えられない。前提としてしっかり教えることも大事だ。(下線：筆者)

これらの発言には、生徒の立場に立って授業づくりを考えるという姿勢、さらに闇雲に考えさせるのではなく、前提としての知識をしっかりと伝えたくて生徒が主体的に考えられる場面を授業のなかにつくり出さなければならないといった自覚が感じられる。別の言い方をすれば、形式だけのアクティブ・ラーニングではなく、内容の伴ったアクティブ・ラーニングにしなければならないという自覚があるということだ。議論の結果、1時間目は保元の乱・平治の乱から平氏が政権の中心に上り詰めるまでを、2時間目はそんな平氏が滅亡していく過程を先に行い、後半では一ノ谷の戦いに戻って岡部の武将六弥太を取り上げることになった。内容が盛りだくさんになることが予測されるので、授業はプリントを作成して進めることも決まった。

最後まで試行錯誤が続いたのが、1時間目、2時間目の役割、それぞれが生徒に何を伝えるのかという点である。内容精査をすればするほど、伝えたいこと、伝えなければならないと思うことが多くなる。正確に伝えようとして細かい部分を盛り込むとポイントが絞れなくなる。だからと言って、最初から内容精査の範囲を絞り込んでしまうと背景がわからなかったり正確さに欠けたりして説明が粗くなる。そんなジレンマを学生たちは抱えていた。2時間目の後半は地域学習の要素が入ってくる。岡部六弥太忠

澄は一ノ谷の戦いで討ち取った武将、平忠度の供養を何故するのか、それを示す教材は教科書にはない。『平家物語』の現代語訳版⁴⁾をプリントで配布することにしたのだが、授業前半と後半をどう繋げるのか、またはどう切り換えるのか、こうした課題を含んだまま授業計画は学習指導案にまとめられた。学習指導案（模擬授業後の修正版）は以下の通りである。紙幅の都合により、本時の目標と学習指導計画の部分のみを掲載している。模擬授業とディスカッションには1年生、4年生、卒業生も加わった。教育実習を経験した4年生、卒業生からは「何が一番大事なのかが伝わって来なかった」、「もっと生徒に前（黒板・教員の方）を向かせる努力が必要だ」など手厳しいが的を射た意見が出される。「伝え方」という新たな課題が具体的に見えてきた。

中学校社会科（歴史分野）学習指導案

小笠原 涼馬・武野谷 稜

〈単元〉武士の政権と東アジアのうごき 〈本時〉平氏政権と日宋貿易（2時間扱い）

〈本時の目標〉

〈1時間目〉①平氏が権力を掌握し武家政権を確立するまでの過程を理解する。②朝廷・貴族・武士の権力構造がどのように変化したのかを考える。③平氏のやり方はやがて周囲の武士から反感を買うことを理解する。

〈2時間目〉①平氏は源氏の追討によって西へ西へと追われ、一ノ谷、屋島の戦いを経て壇ノ浦で滅亡することを理解する。②平氏追討の武士団に郷土の武将、岡部六弥太忠澄が加わっていたことに着目し、平家物語や岡部地域の史跡にも触れながら郷土の歴史に親しみを持つ。

〈本時の学習指導計画〉〈1時間目〉

	学習内容	学習活動	指導上の留意点	教材・備考
導入 (7分)	<p>前回の復習 <発問①>政治の実権は誰が握っていたか。</p> <p><発問②>武士は何番目の存在だったか。</p>	<p>・前回の復習を行いながら、本時の学習内容（平氏＝武家政権の誕生）を確認する。 ※教師からの発問について考え、気付いたことを発言しながら、教師の説明によって理解し学習を深めていく。(以下同じ)</p> <p>〈発問に対する答〉 ①天皇一族（朝廷や院） ②貴族（藤原氏） ③武士（平氏や源氏など） →武士はこの時点では3番手。 →武士は地方の豪族の争いを鎮め、朝廷や院からも重宝され、徐々に力を高めつつあった。 →そんな武士たちを貴族たちはあまり快く思っていなかった。</p>	<p>・教科書を参照させながら、3つの大きな権力があったことを確認する。 ・マグネットを用意し、権力ランキングを示す。</p> <p>・平安時代に天皇の摂政または関白となって長く政治の実権を握っていたのは貴族の藤原氏。藤原氏は天皇の母方の親戚。その後、父方の上皇が政治の実権を握る院政が数十年間、続いた。そんな中、武士は地方から新たに興った勢力であることを強調する。</p>	<p>・教科書 pp.50～51 ・学習プリント ・マグネット 天皇一族 貴族 武士</p>

	学習内容	学習活動	指導上の留意点	教材・備考
展開1 (15分)	<p><2つの戦いに勝利した平氏> <発問③>平氏はどのように権力を拡大していったのだろうか。</p>	<p><戦1>保元の乱(1156) ・院 対 後白河天皇 →天皇が平清盛と源義朝を味方につけて勝利。 →この戦いで武士は活躍し、その実力を認められる。 →権力ランキングの変動 ①武士(平氏や源氏など) ②天皇一族(後白河天皇) ③貴族(藤原氏) <戦2>:平治の乱(1159) ・平清盛 対 源義朝 →保元の乱後、役職や恩賞などの平氏との格差に不満を持った源義朝が反乱をおこした。 →平清盛側が勝ったことによって平氏が権力の頂点に。 ※配布の学習プリントは授業の進行に合わせて該当箇所を記入していく。</p>	<p>・天皇对上皇の戦いであることに注目させる。それだけが武士を味方につけ、それらが活躍したため武士の権力が拡大したことを確認する。 ・平清盛や源義朝だけでなく、武士全体が認められたことを強調する。 ・保元の乱では天皇方に付いて戦った両氏が平治の乱では敵対することに注目させる。 ・権力のトップに立った武士の二大勢力が争った戦いであることを強調する。</p>	<p>・教科書 pp.62~63 ・マグネット 武士 天皇一族 貴族 教科書p.62 図2平清盛 参照</p>
展開2 (12分)	<p><清盛の政策> <発問④>権力のトップに登りつめた平清盛はどんなことを行ったのだろうか。</p>	<p><発問に対する答> →義朝を殺し頼朝を伊豆に流す。 →太政大臣の職位に就く。 →娘を天皇の后にしてその子を天皇にさせる。 →平氏一族に役職を与えて各地を治める。 「平氏に非ずんば人に非ず」 →日宋貿易を行った 輸出品:砂金・刀剣 輸入品:宋銭 *平氏の経済基盤となった。 →船が停泊するための港を整備した。:大輪田泊(神戸)、博多</p>	<p>・教科書を参考にいくつか挙げさせる。 ・娘を天皇の后にして重要な職位に就くやり方は貴族の藤原氏と同様であることに気付かせる。 ・平氏一門を要職に就け、傲り高ぶった平氏は他の武士から強い反感を買うことを予見させる。 ・以前から遣唐使を派遣し、大陸の文化を持ち帰らせてはいたが、対等な貿易は初めてであることに気付かせる。 ・平氏が整備した2港は現在でも日本の代表的な港であることを伝える。</p>	<p>教科書p.62 図1 巖島神社 図3 宋銭 参照</p>
展開3 (12分)	<p><平氏への反感> <発問⑤>平氏に対して周囲はどのように思っていたのだろうか。</p>	<p>→各方面から反感をもたれる。 対天皇家:後白河上皇と対立するが、武力で圧倒し幽閉する。 対貴族:清盛の孫が天皇になった際、貴族から重要な役職を奪う。 対その他の武士:もともとは同じ武士であったため、各地を治めて利益を独占する平氏への不満は増大した。</p>	<p>・保元の乱の際、平氏は天皇側に付いていたことを想起させる。 ・なかには平氏と上手く関係を築いてその恩恵を受けようとした武士もいて、全部が反平氏だったわけではないことも補足する。</p>	

	学習内容	学習活動	指導上の留意点	教材・備考
整理 (4分)	本時のまとめと次時の予告	→保元の乱、平治の乱を経て、平氏政権が確立し、 武士の時代 が始まった。 →平氏は日宋貿易で経済基盤を確立するも役職や利益を独占し周囲の勢力と敵対してしまった。	・次回は政権のトップに上り詰めた平氏が関東の武士団に追われ滅亡していく過程を学習することを予告する。	

<2時間目>

	学習内容	学習活動	指導上の留意点	教材・備考
導入 (7分)	前回の復習 本時の学習内容の確認	・教師からの問いかけに答えるかたちで前時の復習をする。 →平氏が政治の実権を掌握することで武士の時代が始まった。 →平氏の権力乱用により源氏を筆頭とする武士団は反感を持った。 ・本時の授業内容を確認する。 ＜前半＞平氏滅亡の過程 ＜後半＞一ノ谷の戦いと郷土の武将、岡部六弥太忠澄（関東武士団＝源氏方）。	・前時を振り返る問いかけを時系列で小刻みにテンポよく行う。できるだけ多くの生徒を指名し、授業に向き合う姿勢を作っていく。 ・本時は前半と後半で2本立ての内容となることを告げておく。特に後半は郷土の武将を取り上げることで、郷土の歴史に関心を持たせる。	・教科書 pp.62～63 ・学習プリント
展開1 (20分)	＜平氏の滅亡＞ ＜発問①＞ 同じ武士出身の平氏が権力を強めていたら、源氏としてはどう感じるだろうか。 ＜発問②＞源氏はどのような進路をたどって平氏を討ち討したのだろうか。	※発問について考え、気付いたことを発言しながら、教師の説明によって理解し学習を深めていく。(以下同じ) ＜発問に対する予想される答＞ ・不満、怒り、嫉妬、政権奪取を目指すなど。→平氏追討へ ※配布の学習プリントは授業の進行に合わせて該当箇所を記入していく。(以下同じ) ・源氏を筆頭に武士が立ち上がり、平氏を滅ぼす過程を理解する。 ・図5を用いて源氏軍の進路と戦いの読み取りを行う。 ＜戦1＞1184年2月一ノ谷の戦い …義経による逆落とし戦法 ＜戦2＞1185年2月屋島の戦い …再起をはかる平氏軍を打倒 ＜戦3＞1185年3月壇ノ浦の戦い …海上での戦い。平時子が幼い安徳天皇を抱いて海上で心中	・平氏も源氏も天皇の末裔に当たる武士。それが保元の乱以後、恩賞や役職など平氏のみが優遇され、源氏には不満が蓄積していたと話す。 ・図5の頼朝・義経・範頼・義仲の進路を確認させる。 ＜気付かせたい点＞ →頼朝は鎌倉周辺から殆ど移動していない。 →義仲は都で略奪を行い、義経に討たれる。 →平氏追討は弟の範頼、義経によって行われた。 →平氏は都落ちし、西へ西へと追い詰められた。	・教科書p.63 源氏系図 平氏系図 ・教科書p.63 図5 源平の争乱 ・教科書p.63 図4 壇ノ浦の戦い

	学習内容	学習活動	指導上の留意点	教材・備考
展開2 (18分)	<p><岡部六弥太忠澄> <発問③>岡部六弥太忠澄は一ノ谷の戦いでどんな働きをしたのだろうか。</p> <p><発問④>『平家物語』の「忠度の最期」を読んでどう感じたか。</p> <p><発問⑤> (供養塔の写真を見せて) これは何のために建てられたのだろうか？</p>	<p>・一ノ谷の戦いに源氏側として参戦した岡部六弥太忠澄の存在を知る。</p> <p>・配布資料：『平家物語』を読む。</p> <p>→深谷市出身の武将、六弥太忠澄が一ノ谷の戦いの中で大きな戦果を挙げたことを理解する。</p> <p>・小グループで感想を述べ合う。</p> <p><予想される感想></p> <p>→六弥太は卑怯な戦法で勝った。</p> <p>→棚からぼた餅的な戦果を挙げた。</p> <p>→ちょっとズルいのでは。</p> <p>・岡部地域に現在も遺る史跡の写真を見る。</p> <p><五輪塔、板碑、忠度桜></p> <p>→忠澄が、一ノ谷の戦いで倒した武将、平忠度に対し、供養塔を建てるなど手厚く葬ったことを理解する。</p> <p>→写真を見て、教科書の出来事が身近な史跡と関係しているということを理解する。</p>	<p>地域学習を含めることで、郷土の歴史について関心を深めさせる。</p> <p>・以下の内容を確認する。</p> <p>①平忠度は薩摩守。平氏の有力武将。信望も厚い人物だった。</p> <p>②忠澄VS忠度の戦況は殆ど忠度が優勢だった。</p> <p>③忠澄は相手の大将を討って手柄だった。</p> <p>・忠澄の人物像について説明したうえで、供養墓の写真を見せることで関心をより深める。</p> <p>・一方、平家物語は古典文学作品であり、そこに述べられたことは史実とは異なることも付け加えて説明する。</p>	<p>配布資料：『平家物語』（岩波書店）pp.163～165を加工</p> <p>写真をスライドで提示（プリントにも掲載）</p>
整理 (5分)	本時の振り返り	<p>プリントを改めて見直し、本時の学習内容を再確認する。</p> <p>地元で歴史上の人物や歴史的建造物があることで、歴史を身近に感じ、興味・関心を高める。</p>	<p>①平氏の滅亡する過程を理解できたか。</p> <p>②岡部六弥太忠澄と平忠度への関心を深められたか。</p> <p>以上の2点を生徒と対話しながら確認し、授業を終える。</p>	学習プリント

2. 教科科目担当者からの内容面に関する批評

「社会科教育法V」の場では、課題Bを用いて模擬授業のブラッシュ・アップが行われた。教科担当の立場からこの取り組みにいくつかコメントしなければならないが、まずは、課題Aへの取り組みについて簡単に触れたい。

課題Aに取り組んだ学生の「絵詞の場面の読み取りなんて必要なんですか。」との感想は、絵画史料の限られた一部分を切り取って教材とする難しさをよくあらわしたものと言える。が、使い方の視点を変えることで、歴史を主体的に学ばせる契機になると思われる。たとえば、『蒙古襲来絵詞』の個々の場面にこだわるのではなく、「なぜ、季長はこの絵巻をわざわざ作らせたのか。」という問いの立て方はどうだろうか。季長の生きた鎌倉後期の武士社会では従来続いてきた分割相続が限界を迎え、所領の細分化に対処するための単独相続への切り替えが物領制の動揺を生み出していたことは、高校日本史の教科書にも記されている。これを踏まえれば、季長は自身の努力で地頭職を公認された経緯を絵巻に遺すことで、竹崎家の在地領主としての正当性を後代に伝えようとしていたという見方を導けるかもしれない。また、『蒙古襲来絵詞』も、絵巻（絵画）以上に所領紛争が起きた際の裁判資料としての意味合いのほうが強かった可能性にも言及できよう。実際は、課題Aを使った授業作りは結果に結びつかなかっ

たが、社会の全体像を把握する視点を意識して、今回の経験をこれからの活かすことが望まれる。ただ、それら社会背景などを「連携Ⅰ」の文章の中にも的確に織り込むことができなかつた点は、筆者（田中）の反省すべきところでもある。

続いて、課題Bをもとに作られた授業案について、私見を述べる。

まずは、1時限目の内容について。全体を通じて、当時の各権力の関係を、マグネットを使いながら解説する方法は良いアイデアだが、武士の影響力が公家を上回っていく過程で、「天皇一族」と「貴族」を分けることには慎重であるべきかもしれない。教材を作る側のイメージとして、藤原摂関政治の様相を授業の中に織り込みたい意図があるのかもしれないが、天皇と貴族は一括で公家として認識し、それとは大きく異なる勢力として武家があることを見失うべきではないと思う。公家と武家を二項対立的に捉え、「旧体制的な公家と、新たな勢力としての武家、武家主導の社会に移行する分水嶺としての院政期」という構図を示したほうが、最初の武家政権とも評される平氏政権の画期性をより強く理解させることができるのではないか。

また、学習指導案では、武士の勢力伸長を「徐々に力を強め」「地方から新たに興った勢力」と記しているが、これを具体的にどう授業の場で反映させるのか気になるところである。これを過不足なく教えるには、社会の基盤が公地公民制から荘園制に切り替わる中で、在地領主の位置づけが重要になってくる過程（清水書院の教科書p.51「荘園の増加」の項）を前提として武士の台頭を論じ、ただ軍事面だけでなく、経済的な面でも公家勢力は武士に依存しなければならない部分が多かったことを踏まえる必要があるだろう。これを短時間で簡潔に教えるには、教える側が古代・中世移行期の社会構造（荘園公領制、王朝国家、武士職能論など）を十分に把握していなければならず、より重点的な準備、工夫が求められる。

いくつか検討すべき点を列挙したが、学習指導案の発問、展開の流れは、おおむね問題のないものとして仕上がっている。源氏を打ち破り栄華を極めていく平氏政権について、藤原摂関政治に通じる外戚政策をおこなった点を授業の中で強調することは、次の鎌倉幕府の、独自の機構を整備したあり方との対比を理解させるうえで効果的である。平氏政権が瀬戸内海交通網を押さえていたことを、現在の日本の代表的港湾都市である兵庫や博多と結び付けて教える点などは、教わる側に平氏政権の経済力を実感させる助けになると思われる意義深い（なお、清水書院の教科書には厳島神社の写真が載っているが平家納経の写真がない。他の資料集などを使って装飾経の実物を示すことができれば、平氏の豪華ぶりがより鮮明となる）。また、教科書では、その文章量の少なさから、中央政界に食い込んできた平氏が即座に政権として権力をふるったかのような誤解を生むことがあるかもしれない。授業の場で、平氏政権が急に成立したものではなく、当初は、朝廷内の有力者の一員であった平氏が、しだいに専横的となって公家勢力の反発を招くようになった点を上手く伝える（平清盛の任太政大臣と、安徳天皇の誕生の間には約10年の開きがあることなど）ことができると、なお良いだろう。その意味において、学習指導案の中で「全部が反平氏だったわけではない」点を補足することに触れている点は高く評価できる。

続いて、2時限目の授業の内容について。ここでは50分の授業が前後半に分けられている。

前半部については源氏の蜂起と治承・寿永の乱の展開が中心になるが、授業の中で「源氏には不満が蓄積していた」点ばかりに目を向けさせると、歴史認識が一面的になるおそれがある。平氏躍進の時世で源氏勢力が不遇を託っていたことは事実だが、源氏挙兵のきっかけは後白河法皇をはじめとする中央

政局での反平氏運動にあり、公家勢力が源氏の抱く平氏への敵対感情を利用した側面もあることを忘れてはなるまい。源氏による平氏討伐が公家勢力の号令なしに実行できなかったことは、のちの鎌倉幕府の公武二重政権のあり方、ひいては、中世を通じての公武関係にも関わると言える。中学校社会科の授業の中でここまで踏み込む必要はないかもしれないが、教える側は留意すべきである。

後半部は、郷土の有形無形の歴史的遺産を活用し地域理解を深めることを意図し、授業の中で最も力点をおくべきところである。が、これを学習指導案の時間配分に従い20分強という短時間でまとめ上げることは至難と言うほかない。これは模擬授業を行った学生自身が痛感したことでもあろう。やはり、割愛できる部分を省き、強調すべきポイントにより時間をかける工夫が必要である。この授業の目標があくまで地域理解にある以上、『平家物語』の原文を使って、忠澄の卑怯な振る舞いや文学作品と史実との齟齬を確認するのに時間を使うよりも、郷土に散らばっている遺跡や遺物の実物を見せたり、地図を広げて分布を示したりすることに特化したほうが、より授業の意義が増すとは言えないだろうか。そのためには、教える側が自治体史をはじめとする諸資料に目を通すなど、事前の準備をはかることが重要なのは言うまでもない。

以上、教科担当の立場から学習指導案に意見を述べたが、全体としてはよく練られた指導案であったがゆえに、重箱の隅をつつくような批判に終始してしまった。また、教職科目の立場からすると的外れの指摘ばかりかもしれない。ただ、「連携Ⅰ」「連携Ⅱ」を経てここに至り強く感じたのは、教職学生の歴史知識の不十分さであった。ただ、この原因を、学生の不勉強さに求めるつもりは毛頭ない。なぜなら、大学受験で日本史を受験したり、史学科に進学したりしない以上、中等教育の場において歴史を学ぶ意義を見出しにくいのが現状だと言わざるを得ないからである。そして、その知識面を補完させていくのが大学教職課程での教科科目の使命だが、(教科担当者の教務能力不足を棚に上げて言えば)1年半期15コマの授業でそれをまとめ上げることも、かなりの困難を伴う。日本史の場合には、最低限の通史理解をさせなければならないが、現行の大学のカリキュラムにおいてそれが保証されているかどうか、検証する必要があるだろう。昨今、高等教育の場でもしきりにアクティブ・ラーニングの導入が叫ばれるが、その前提として、まずはアクティブ・ラーニングを成立させるための正確な一定水準の知識を確保させることに傾注すべきではないだろうか。

結びに代えて

本稿は二つの目的を持っていた。まず、授業づくりの過程において教職科目と教科科目との連携がどのように活かされたのか、または活かされなかったのかを検証するという点だが、結論からいうとますますその必要性を実感することとなった。「連携Ⅰ」及び「連携Ⅱ」において教材化の可能性を提示したものの、授業づくりの実践に持ち込むにはいくつものハードルがあった。学生の授業観であり、歴史の楽しさの実感であり、知識の不足である。方法論よりも前に内容論、または内容論と方法論が相互に機能することが重要なのだ。僅か1年間の実践においても学生たちの気づきや成長は著しい。いま現在は教科科目と教職科目は別々の授業として行われ、教員同士、教員と学生が本実践のために個々に連絡を取り合っていた。これが教職課程のカリキュラムとして実行されれば、学生にさらに多くの連携の機会を提供できるのではないかと考える。折しも「中教審答申において示された今後の改革の方向性」が

発表され、そのなかに「教職課程については、学校種ごとの特性を踏まえつつ、『教科に関する科目』と『教職に関する科目』等の科目区分を撤廃し、新たな教育課題等に対応できるように見直す」⁵⁾とある。近々、告示される新学習指導要領を踏まえてのことであり、教職課程のカリキュラムを再考すべき時機と言えるだろう。

次にアクティブ・ラーニングを意識した授業づくりという点だが、中学校の歴史の授業としては内容精査の点においても、教材や発問の吟味という点においても課題は多いが、少なくとも「意識」はされていたことが学生の発言からわかる。通常の授業の枠を超えて始まった「社会科教育法Ⅴ」であったが、学生は授業づくりの過程でいくつもの課題に直面し、それを解決すべく調べ、互いに相談し、教員に意見を求めてきた。その活動はまさしくアクティブ・ラーニングそのものだった。自動車通学をしている一人の学生が、「通学途中に畠山重忠の像を見つけました。案外、身近にあるもんですね。」と伝えてくれた。「連携Ⅱ」で田中が「頼朝との結びつきの強い武士勢力」(5頁)として紹介した武将である。これも「知識のあることが楽しさに繋がる」一例と言えるだろう。間もなく新学習指導要領が告示される。大学の教職課程においても学生たちに深い学びが為される授業を行うことが課題である。

[註]

- 1) 佐藤由美・田中信司「教職課程における『教職に関する科目』と『教科に関する科目』の連携 ― 中学校社会科歴史分野『蒙古襲来』を事例として―」埼玉工業大学人間社会学部紀要 第13号, 2015年3月, pp.9~21 本文では「連携Ⅰ」と略す。
- 2) 佐藤由美・田中信司「教職課程における『教職に関する科目』と『教科に関する科目』の連携Ⅱ ― 地域教材『岡部六弥太忠澄』に着目して―」埼玉工業大学人間社会学部紀要 第14号, 2016年3月, pp.1~13 本文では「連携Ⅱ」と略す。
- 3) 文部科学省「教育課程企画特別部会 論点整理」によれば、アクティブ・ラーニングは「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び」(17頁)とされる。尚、授業づくりを实践するうえで同文書のpp.16~19で述べられた「アクティブ・ラーニングの意義」を参照した。
- 4) 尾崎士郎訳『平家物語現代語訳』岩波書店, 2015年4月, pp.163~165
- 5) 文部科学省初等中等教育局教職員課「『これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について(答申)』において示された教員養成に関する課題と今後の改革の方向性」(平成28年5月28日) p.2

[付記]

本稿で取り上げた授業づくりに参加した学生(卒業生を含む)は以下の通りである。

小笠原涼馬・亀山裕樹・河原健太・武内勇樹・武野谷稜・川上佳澄・竹松綾祐・佐藤全

